

岸田裕之著

『大名領国の経済構造』

矢田俊文

本書は、岸田裕之氏が今までに執筆した戦国期の経済に関する論文と新たに書き下ろした論文からなっている。

1

本書の構成と内容は以下の通り。カッコの年は論文の刊行年である。

序章 課題と史料（一、新稿、二、一九九五）は、本論文集の構想とそのため史料について論じたものである。岸田氏は、本論集を中国地域を制覇した毛利氏の「領国」を中心にしてその周辺部や瀬戸内海地域をも含め、その経済構造について、史料蒐集調査によって発見した新出文書を活用することを通して実態的に解明した研究であるとする。史料については、藩府の命をうけた各家臣が藩府へ家蔵文書を提出するが、その差出原本は毛利氏との縦の政治関係を重視する基本的方針のもとに「判物」中心に作成されたもので、史料蒐集調査をすると、江戸時代中期の毛利氏家臣の家蔵文書のうち、『閥閥録』の編纂基準からはずれ差出原本に収録されなかった原文書、『譜録』等にも収録されなかった文書が多く残されている。これらの新出文書はその性格からして、

「判物」を中心として描かれる世界を越え、中世社会において各人が形成した歴史的世界の多様かつ豊かな歴史像を築き上げていく格好の材料となりうる。よって、それらを翻刻・紹介して、個別の権力編成を越えて横の広がりを示す都市・交通・流通・貿易等の大名領国の経済構造について描き出すことをめざした、とする。

I 大名の領国経済と家

第一章、中世後期の地方経済と都市（一九八四）は、鈴木敦子氏の「中世後期における地域経済圏の構造」（『世界史における地域と民衆（続）』歴史学研究別冊特集、一九八〇、同『日本中世社会の流通構造』校倉書房、二〇〇〇所収）の研究視角を受けとめ、中世後期における地方経済と流通の展開を、都市機能と関連させながら論じたものである。

第二章、戦国大名毛利家政所における日用品の調達（新稿）は、毛利家がどのようにして日用品を調達したかを検討したもので、近習衆の政所神五郎が当主のごく見近かにあつて衣類や腰物等の身のまわり品やその材料の調達を行ったする。

第三章、毛利元就直轄領佐東の研究（新稿）は、河川水運と内海流通・山陽道の交差する要衝であり、平安時代末期に厳島社領の倉敷地がおかれ鎌倉時代には佐東八日市が開かれた、直轄地佐東地域の支配の実態を解明したもので、元就が直轄領佐東で実施したことは、自らの死没後をも展望して毛利家支配の安定をねらった人材の育成・登用であり、新しい支配システムの構築と整備であったとする。

II 國人領主の財政と性格

第四章、國人領主の財政と流通支配（一九八六）は、山陰・山陽の交通・流通の要衝を本拠とする山間地域の「國人領主」佐波氏の財政のあり方と山間地域の「國人領主制」がもつ固有の性格を解明したもので、佐波氏は領域内市場に関与し、また本領域を越えて国内交通・流通上の要衝をも領有して拠点を確保し、さらに商業活動を行うことによって流通がうむ利得に積極的に対応するとともに、商人司を掌握して組織的かつ広域的に商人や商業活動を統括していこうとしていたとする。そしてまた、商業・金融・交通・運輸等の重要な経済機能を兼備した被官の「土豪的商人」が「國人領主」の交通・流通を支えたと述べる。

第五章、石見益田氏の海洋領主的性格（一九九三）は、益田川・高津川河口に現在も居館等の遺跡を残す益田氏の海洋的性格を析出しながら、農業生産力に片寄らない益田氏の基盤全体を明らかにすることを目的にしたもので、益田氏の流通貿易を支えたのは、領内の山・河・海・地下を含む産業資源であり、流通貿易に積極的に関与していくなかで高めた経済力であり、博多付近や見島を領有する益田氏の経済圏は東アジアの規模のものであったとする。

III 地方都市と商人司

第六章、大名領国下における赤間関支配と関九役佐甲氏（一九八八）は、「大名領国」下における赤間関の実態と性格を明らかにしようとしたもので、「領国」の西端に位置する要衝の直轄関において、自らの関代官を通して軍事物資や特定の高級外国産品

を直接入手したとする。

第七章、大名領国下における杵築相物親方坪内氏の性格と動向（一九八九）は、室という参詣宿を経営し、杵築相物親方職を領主千家から給所として給与され、尼子氏から安堵された商人司である坪内氏が伝来する文書の分析を通して、「大名領国」下における地方都市出雲杵築の構成ならびに商人や地下中の活動の実態などを究明したものである。

IV 河川領主と海の大名

第八章、備作地域の戦国大名と中世河川水運の視座（一九九二）は、大河に臨む地域においては当該時代の歴史的世界を再構成していくには、水系の産業・資源や河川交通・流通が果たした役割について究明する視座をもって考察をしなければ研究が農業生産力論的なものに片寄って一面的な分析に陥り地域の全体像や固有の性格が理解できなくなるといふ問題意識のもとに、沼元氏の活動と性格を考察したもので、沼元氏は旭川中流の福渡を基地として旭川水運を担い、宇喜多直家に属して篠茸城将として在番を行った領主であるとする。また、山間部から内海に向けて、そして内海から山間部へと陸路よりも多量に各地域の物資を運送し、距離的に離れた地域の人々の生活を交流させる河川水運の歴史的役割は、現代の交通・運輸のあり方から推測される以上に大きかったと述べる。

第九章、戦国時代の神戸川沿い（一九九二）は、戦国時代における神戸川沿いの諸様相とその交通路としての役割を検討したもので、神戸川沿いが重要な交通路としての役割を果たした背景に

は、塩冶・古志・朝山・須佐・一窪田・吉野と水系を上って来島三田市に至るルートを日常的に往還する人的・物的な結びつきがあったことに注目しなければならないとする。

第一〇章、海の大名能島村上氏の海上支配権の構造(新稿)は、能島(愛媛県宮窪町)を本拠とした能島村上氏を素材に、中世の海上勢力の固有の視座と構造を検討したもので、「海賊」能島村上氏は、大陸からの太い流通経済幹線に連結された西日本地域、すなわち南九州から豊後水道を経て豊予海峡を北上し、また北部九州から赤間関を経て瀬戸内海を畿内に至る広い海域で、海上支配権を行使したが、その基本的な構造は陸の「大名」側の通行料を免除したうえその安全通航を保障し、そのかわりに陸の「大名」から「領国」内において札浦(通航する船に賦課する通行料を徴収する港津)を安堵されている関係で、そして、その札浦において商船から通行料を徴収し、その代償として上乘などによってその通航の安全を保障しているとし、従来の研究では、能島村上氏は毛利氏に軍事的に勤仕する「水軍」と見なされ、他の大名との関係については、一時的なものとのされ、あまり顧慮されることもなかったが、このような従来の「水軍」としての編成の達成度をみようとする方法は陸の大名の軍事力編成に視点を置いたものであり適切ではない、と主張する。

V 展望——構造的解体

第一章、能島村上武吉・元吉と統一政権(新稿)は、能島村上氏と秀吉政権との関係を論じたもので、秀吉政権の広域的流通経済政策の論理が、旧来の地域主権の時代、いいかえれば海に境

界がない時代の流通経済の有様というものを否定してしまつたとする。

2

岸田氏の著書のうち、とくに評価すべき点は、以下の二点である。

一つは、史料論で、『関閥録』の編纂基準からはずれ、差出原本に収録されなかつた原文書、『譜録』等にも収録されなかつた文書を調査し、長州藩が編纂した『関閥録』『譜録』が語る世界とはことなる戦国期の歴史的世界を描き出したことである。

二つ目は、海戦期権力のもつ独自性を明確に示した点である。特に、「海賊」能島村上氏は、大陸からの太い流通経済幹線に連結された西日本地域、すなわち南九州から豊後水道を経て豊予海峡を北上し、また北部九州から赤間関を経て瀬戸内海を畿内に至る広い海域において、海上支配権を行使したのであり、従来の研究のように能島村上氏を毛利氏に軍事的に勤仕する「水軍」と見なし、「水軍」としての編成の達成度をみようとする方法は陸の大名の軍事力編成に視点を置いたものであり適切ではない、とする岸田氏の指摘は重要である。また、海と海に生きる人々は、決して陸や海に生きる人々の属地・属物ではなく、中世という海に境界のない時代に海に生きた人々は、陸に生きた人々や陸の大名の論理によつては解けない独特の結集をし、陸に従属しない、いわば土着の視座に基づく独自の活動をしていた、とする指摘も重要である。

岸田氏の研究に対する不満な点・疑問点として、二点について述べたい。

まず中世考古学の成果を組み込んでいないことについて。日本中世史研究は、中世考古学の成果を意識しながら行われてきた(三浦圭一「中世の分業流通と都市」『大系日本国家史2 中世』東京大学出版会、一九七五)同『日本中世の地域と社会』思文閣出版、一九九三所収)、脇田晴子「室町期の経済発展」『岩波講座日本歴史7 中世3』岩波書店、一九七六、鈴木敦子前掲「中世後期における地域経済圏の構造」。しかし、氏は、中世考古学の成果を取り入れようとはしない。岸田氏は、長い歴史を乗り切つてやっと残された限られた史料、その地域の歴史的世界の一面・一断面を示している史料をみるにつけても、当該時代の実態に即して描き出そうと努める姿勢を持たなくてはならず、そのためには、地形・資源・産業・交通・生活等々を踏まえた地域を見る視座が書かせない、と述べておられる。それならば、中世考古学の成果を取り入れるべきではないか。高根県益田市には、中世前期の貿易陶磁が出土する古市遺跡・横路遺跡(榊原博英「高根県古市遺跡・横路遺跡と出土陶磁」『貿易陶磁研究』一八、一九九八など)があり、文献史学(日本中世史)の井上寛司氏は、それらの成果を取り入れて中世の石見国を復元しようとしている(井上寛司「中世石見の繁栄——西日本海水運の拠点——」『ものがたり 日本列島に生きた人々』2 遺跡下」岩波書店、二〇〇〇)。広島県福山市の草戸千軒町遺跡の遺物を検討するなか

で文献史学の成果も取り入れ、北部九州・瀬戸内海の流通の時期区分を論じた中世考古学の研究も生れている(鈴木康之「日本中世における桶・椀の展開」『考古学研究』四八—四、二〇〇二年)。文献史学の側の研究者が必ず中世考古学の成果を組み込まなければならぬわけではない。中世考古学では主たる史料としない文書等で議論を組み立てればよいし、そうすべきだと思う。しかし、中世考古学の成果に対してどのような立場で研究をしているのかについて表明はすべきではなからうか。

次に、史料論について。岸田氏は、『関関録』の編纂基準からはずれ、差出原本に収録されなかった原文書『譜録』等にも収録されなかった新出文書を翻刻・紹介して、個別の権力編成を越えて横の広がりを示す都市・交通・流通・貿易等の大名領国の経済構造について描き出すことを目指したと述べている。しかし、第二章の「戦国大名毛利家政所における日用品の調達」では、新出文書によって、政所神五郎宛の毛利隆元書状が自筆であり、捺封様式であることから、隆元と神五郎が人間的・精神的にきわめて親しい関係にあったとし、さらに神五郎が当主のごく見近かにあって衣類や腰物等の身のまわり品やその材料の調達、諸方面への使者として派遣され、用件の調整や処理にあたった、と述べておられる。

この新出文書であきらかにされた近習衆政所神五郎は毛利権力と横の関係にあるのだろうか。近習衆政所神五郎は、「判物」の世界からあきらかとなる権力編成とはことなるもう一つ別の権力編成が存在することを示しているのではなからうか。書状の世界でしかわからないもう一つの権力編成の存在を明らかにしたと考

えるべきではないだろうか。

長州藩が編纂した『閩閩録』『譜録』が語る世界とはことなる戦国期の歴史的世界は、都市・交通・流通・貿易などだけではなからう。

4

岸田氏の本書の魅力はなんといっても新出文書の丁寧な調査とそれによる豊かな歴史的世界の再構成にある。中世考古学等、隣接諸科学の成果を取り入れることも重要であるが、文献史学（日本中世史）の研究はなによりもまず徹底した文書の吟味と分析が重要である。そのことを抜きにして隣接諸科学の成果だけで論を

組み立てても意味はない。文書だけでは都市・交通・流通・貿易等の問題を論ずることが難しいが、岸田氏はそれをめざし実現した。本書で学ぶべき点はまずここにある。

次に評価すべきことは海の領主論である。私も毛利氏の研究をしたことがあり、「水軍」といわれる領主のことを考えたことがあるが、その時はまるで理解できなかった。岸田氏の「人物で描く中世の内海流通と大名権力」「海の道から中世をみるⅡ 商人たちの瀬戸内」（広島県立歴史博物館展示図録一九、一九九六）を読んだ時に理解できるようになった。本書ではそれが論文として収められている。海の領主論とでもいうべきものが提示されている。新たな領主論である。

（A5版 三九七頁 二〇〇一年二月 岩波書店 九六〇〇円）

（新潟大学人文学部教授